

KAS

風の谷 びゅう VIEW

社会福祉法人 風の谷
相模原市中央区田名7236-3
発行責任者 政野 光廣
042-760-1033
<http://www.kanagawa-id.org/yamabiko/>
e-mail: ykoubou@pastel.ocn.ne.jp



暑中お見舞い申し上げます。



地域交流バザーでの
ご協力とご参加、
誠にありがとうございました。
今年も暑さの厳しい日々が
続いておりますが
皆様のご健康を
心よりお祈り申し上げます。

【2011年 夏号】

- ◇巻頭文 P 2 ◇自閉症支援センター便り P 3
- ◇東日本大震災職員派遣について P 4 ◇ケアホーム便り・ヘルパー便り P 5

◇ 発行人 神奈川県自閉症児・者親の会連合会 代表者 内田照雄 〒243-0035 厚木市愛甲 910-1 コープ野村 6-109
◇ 毎月15日発行 購読料1部 50円

東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

本年3月11日の震災発生時には、震源から遠く離れたここ相模原でも、今まで経験したことがないほどの大きな揺れを感じました。それとほぼ同時に起きた停電により、通信手段や交通網がマヒするなど一帯が大きな混乱に見舞われました。

やまびこ工房ではお蔭様で建物や器物の損壊等はなく、利用者の方たちにも心配したほどの混乱はありませんでした。ただし、多くの交差点で信号機が点かず渋滞となり、送迎に多くの時間を要したり、電車が止まったためご家族が迎えに来られなかったり、固定電話が使えず携帯電話も極度につながり難い状態になり、ご家族や関係者となかなか連絡がとれないなどの予期せぬトラブルは相当数ありました。今回の震災で経験したいくつかの事柄については、貴重な教訓として今後の防災対策に是非反映させたいと思います。

【支援チームにリーダー派遣】

さて、震災後暫く続いた計画停電やガソリン不足の影響等もほぼ落ち着いた本年4月より、神奈川県知的障害施設団体連合会（横浜、川崎、相模原、地域の4協会で構成）では、知的障害者施設が避難所になった宮城県石巻市の福祉避難所に、一週間交代で5名から8名編成の支援チームの派遣を続けてきました。この間、やまびこ工房からも職員1名を支援チームのリーダーとして派遣しました。およそ二ヵ月半にわたったこの活動も、福祉避難所の閉鎖に伴い6月末をもって一旦中止と決まりましたが、いずれにしても被災地の状況の変化やニーズに応じた息の長い、そしてきめ細かな支援は継続的に必要なのだと思っています。

私も相模原の協会役員をさせていただいていることもあり、4月末に現地視察のため宮城県と岩手県の被災地に行かせていただきました。そのとき福祉避難所には被災された多くの障害者やそのご家族が身を寄せておられましたが、この方たちがいずれ避難所から出て、一人ひとりが自分の生活を取り戻していく、または再構築していく、そうしたプロセスに関わる支援が今後膨大に必要となるであろうことをひしひしと感じて帰ってきた次第です。

【相談支援体制の充実こそ】

私たち、知的障害者福祉の領域で支援者として関わってきた人間の多くは、入所・通所の形態を問わず施設という器の中で、乃至は施設という器を介して、利用者の方たちと関わる経験を長きにわたり重ねてきました。ですので、福祉避難所という拠点への支援はイメージがしやすく対応も十分可能でした。しかし、被災した人達の暮らす地域を対象とした、いわば「点から面へ」と支援をシフトしていくに際しては、残念ながら現在の私たちの力では組織的な対応が十分にできないと認めざるをえません。また、地域の中でしっかり仕事のできる、相談支援の専門性を伴った人材がまだまだ育っていない（存在として「いない」のではなく「不足している」）ことも、この間実感しているところです。

先日「地域を耕す相談支援とは」をテーマにした研修会に参加する機会を得ましたが、「まさにその通り！！」とそのテーマに深く共感しました。相談支援の実践を通して地域を耕す人材をいかに育成していくのかが、今後の福祉のあり方を決定付ける大きな要因にもなっていくのではないかと常々感じていたからです。（いささか大げさかもしれませんが・・・）

相模原市では、これまでの相模原市障害者自立支援協議会を、相談支援を中心に組織を再編する取組みが始まっています。自立支援協議会とは、障害のある人はもちろん、だれもが地域で暮らしていける仕組みをどのようにして実現していくのかを議論し、その実現に向けて必要な活動をするための組織であると理解しています。

私も同協議会のメンバーの一員として、相模原という地域を耕す支援者の育成につながるよう、新たな相談支援体制の構築に向けた取組みに尽力したいと思っております。その取組みの結果が当法人の支援の幅を広げ、支援の質を向上させることに繋がるものと確信しております。

今後とも更なるご支援とご協力のほどお願い申し上げます。

施設長 中島博幸

「相模原自閉症支援センター便り」

3/11の震災の後、“想定外”という言葉が、ありとあらゆるメディアから発信されていました。ある意味情報操作なのではと思いたくなるほどの乱発振りでした。さて、この想定外という言葉を少し考えてみると、“「想定」とは、「ある一定の状況や条件を仮に思い描くこと」（広辞苑）」とあります。それでは「想定外」とは、「仮に思い描いた一定の状況や条件に入らないこと（もの）で、（想定者が）思いもよらない結果をもたらす」ということになるのでしょうか。それではなぜ、この想定外と遭遇してしまうのでしょうか？理由としては、「仮に思い描いたある一定の状況や条件（根拠）がまちがっていた。あるいは思い描けなかった」もしくは、「意図的にある一定の状況や条件（根拠）を仮にでも思い描かないようにしていた。」ことが考えられるでしょう。後者の場合、本来想定外とは言わないのかもしれませんが、今回の震災に関しては後者と感ずることも多かったです。

実は自閉症の方と接する中でもこの「想定外」という言葉に遭遇することが多いです。自分自身が直接遭遇する場面もありますが、相談という形で間接的に遭遇することも多いです。例えば、「急に飛び出した、急に座り込んだ」「他人のご飯に手を出した」「要求に応えたのに、満足せずにイライラされた」「知らない家に入りカレンダーをめくった」「急に笑顔が増えて、動きが良くなった」等々、挙げたらきりがなくらい出てきます。さて、これらの多くの想定外は前述した理由のどちらになるのでしょうか？多くの場合、前者です。自閉症の人たちには「三つ組」と言われる特徴を始め、身体生理的なものや、情報処理の方法や実行機能の特徴など、特に行動を理解する上で想定しておかなければならないことがたくさんあります。そして重要なのは、その想定には科学的な根拠が存在していて、単なる憶測や個人の経験値に頼ったものでない、ということになります。ですから、支援者には常に自閉症を理解しようとするための勉強が必要になります。そうすれば自然に、「自閉症の人たちの発想することにどれだけ寄り添い、多くのことを想定してあげられるかが、支援者に求められること」につながるのだと思います。その時、「想定外」という言葉に自己の責任や無力さを置き換えることはなくなるのではないのでしょうか。本当は後者の理由もしっかりと考察していかないとはいえないと考えています。一般社会とか普通、人間性とかで曖昧にして、自閉症の人たちのために想定されるべき案件を自己の都合で変換あるいは無視し、想定外にしないような努力も職員全体でしていきたいと思っています。

6月初めにとあるチャリティーコンサートで、吉村誠司氏の話をお伺いする機会に恵まれました。吉村氏は、阪神淡路大震災でのボランティア救援活動をきっかけに「NGOヒューマンシールド神戸」を立ち上げ、中国四川や新潟中越地震のときにも現地で活動していた人です。東北地方太平洋沖地震の当日には気仙沼、その後すぐに石巻地区に入り災害ボランティアネットワーク作りや、現地にとどまっていたボランティア活動に邁進されています。その時の話の中で、『人間の記憶は風化されやすい。とにかく継続した支援をお願いします。』と何度も話されていました。東北地方太平洋沖地震と大津波の発生から4か月が過ぎました。しかし、今でも一向に収束の目途も立たない福島第一原発の事故により、さらに多くの人びとが避難生活を余儀なくされています。しかしなぜか、私の周りでは日常に戻っているような錯覚に陥ることがあります。明らかに情報の減ってきた今だからこそ、継続した取り組みを個人個人で行かなければいけないと思います。最後に、東日本大震災で亡くなられた方たちのご冥福をお祈りするとともに、被災された方たちに心よりお見舞い申し上げます。同時に一刻も早い本当の日常が戻ることをお祈りしつつ、継続した支援を続けていくことを誓いたいと思います。

西村三郎



<東日本大震災職員派遣に参加して…>

5月1日～7日の7日間、震災後の宮城県石巻市の福祉避難所にボランティアとして派遣されました。神奈川県知的障害施設団体連合会が県内の各施設に呼びかけ、集められた職員をグループ別に4月から一週間単位で派遣してきました。福祉避難所は一般の避難所では生活するのが難しい障害をお持ちの方たちとその家族が避難生活をするところです。石巻市ではこの一ヶ所のみで、私たちがいったときには、30世帯、30名の障害者とその家族、総勢70名が避難生活をしていました。

石巻市は皆さんご存知のように津波の被害がひどく、東北の各都市で一番犠牲者・行方不明者が出たところです。石巻市は運河が発達した市です。この避難所の直ぐ前にも運河が流れており、震災時にはこの運河を津波が上ってきたそうです。運河を挟んだ対岸の集落は津波で流されていました。この福祉避難所となったひたかみ園はたまたま津波の被害を免れました。20年が経過して取り壊しを3日後に控えた石巻祥心会の元入所施設「ひたかみ園」に震災当日の夜から石巻赤十字病院を經由して次々と被災者が自衛隊のヘリコプターで運び込まれてきました。既に入所者は新設された施設に移って施設内には誰も居なかったそうです。この非常事態に対し、祥心会から職員を派遣しこれに対応してきましたが、最初の夜は施設にあったローソクを灯し、なんとか一夜を明かしました。その後も夜はローソクの火を灯しながらの生活が続きました。ひたかみ園に電気・水道が復旧したのは3月下旬だったそうです。この時の状況を私たちがイメージできるのはあの計画停電です。時間の限られたあの計画停電の数時間でさえ、如何に大変だったか、覚えている方も多いと思います。先の見えない停電が2～3週間続いたわけです。被災された方、職員の不安と苦労は想像を絶します。当然職員の方も被災者で家が津波で流されていたり、親族の行方が分からなかったりしている訳です。「震災にあって家も家族も亡くした。ただここで働けるだけで自分は幸せだと思わなくては・・・。」という職員もいる訳です。そんな中、私たち第5陣6名（男性4名、女性2名）がひたかみ園に入ったのは電気もガスも水道も通じ、避難所の生活も落ち着き始めた5月でした。

初日の朝、県福祉会館からバンで出発。運転を交代しながら東北道を抜けました。福島に差し掛かった頃から地震の影響で所々道路が盛り上がりたり凹んだりしていました。こちらでは既に散った桜が山の斜面に未だきれいに咲いていたのを覚えています。東北道を降りて間もなく、遠くの海岸線に弱々しく松林が残る広大な平地が広がりました。津波で全て流されたのです。6時間のドライブの後、石巻で夕食を摂ることにしました。被災地に煌々と電気がつく巨大モールが営業を開始していました。車を降りた途端、オキアミが腐った様な強烈な匂いが鼻を衝きました。津波で流された海産物の腐臭です。近代的な建物と強烈な匂いのコントラストが印象に残っています。このモールでは当日被災者を受け入れ、商売抜きで毛布やバスタオルなどを配り、泊めてあげたそうです。

引継ぎも慌しく第4陣が去り、初日からひたかみ園の勤務に就きました。その日から24時間の勤務を職員と共にこなしていききました。寝る時間以外は殆ど避難所の方と過ごしてきました。避難所で生活していた方は2ヶ月が過ぎ、一見ここでの生活に慣れ、落ち着いている様に見受けられました。知的、精神、身体の障害者の方と老人の食事・トイレ・入浴が直接介助の対象者でしたが、その親御さんやご兄弟に寄り添い、話を聴くことも私たちは大事な仕事と考えていました。入浴は一日置きで週3回。洗濯は交代性、壁の薄い狭い居室での生活、食事は配給されたオニギリ、菓子パン、弁当に炊き出しの味噌汁など。トイレは水力弱く、詰まる可能性があるため、使ったトイレットペーパーは流さずにゴミ箱に回収していました。出発前のガイダンスで口を酸っぱく言われたのが「私たちはお手伝いをさせてもらうだけです。ボランティアです。職員の至らない処、改善すべき処があったとしても、被災者でありながら必死で支えてきた彼らに対して何も言わないように。気が付いたら自分で動きなさい。避難所の方たちに対しては、寄り添ってあげなさい。話ができれば隣に座っていてあげなさい。」ということでした。様々なことがありましたが私たちのグループは7日間この言葉を実践してきました。毎日余震が続く、決して易しくない環境の中で共に働いた仲間です。その分強い絆で結ばれた感があります。

避難所の方たちの体験談はそれは凄まじいものでした。一部だけしか紹介しません。あの日、3月11日は石巻では雪が降ったのです。突然の地震、津波で家ごと流され、海の中に投げ出され、上も下も訳の分からぬまま必死で家の一部にしがみ付いて海の中を漂流している時、雪が降ってきたのです。瓦礫にしがみ付きながらハラハラと舞い落ちる雪に気が付き空を見上げたこと、海水の冷たさと寒さで全身震えながら救助を待ったことを鮮明に覚えているそうです。『生と死』が紙一重の瞬間の連続でした。

7月の連休に石巻に行ってきます。これから何が出来るか？が課題です。

(上条)

ヘルパー便り 其の言

やまびこ工房のガイドヘルプは分業制によって成り立っています。事前にプランを作成するコーディネーターと実施するヘルパーです。外出等の希望を承り、コーディネーターはプラン作成とそれを実施するのに適したヘルパーへ依頼し、利用者にプラン内容の了解を得て、実施に至ります。

実際、利用者の気持ちはなかなかわからず、ニーズに叶った内容なのかは何回か実施してみないとわからないことが多いです。帰宅後の様子をご家族より伺ったり、実施中の様子をヘルパーから聞きながら分析したり、さらに別のヘルパーにも担当してもらい、意見を求めたりなどして、次のコーディネートに生かしていきます。

自閉症者は自分の気持ちを正確に他者へ伝えるのが苦手です。そのため、周りの人の一方的な見方によって、好きなもの、嫌いなものまで決められてしまうことも多々あるのです。その弊害を少しでも軽減するため、コーディネーターとヘルパーを分け、多くのヘルパー（実際は3~5名）と外出することによって、本当の気持ちに私たちも近づけるように心がけています。

実際の活動については次回お知らせします。お楽しみに
(薬師丸)



ケアホームナウシカ便り 其の言

ケアホームナウシカは、開所してから今年で10年目を迎えました。始まった当初は年・月単位の体験型ホームでしたが、現在は5人の利用者さんが定住され、月曜日から金曜日、土曜日まで利用されています。日中はやまびこ工房で仕事をして、夜間はケアホームナウシカ、週末は家庭で過ごす、というサイクルで皆さん生活されています。

ひとつ屋根の下、5人の生活ですがそれぞれが個室を持ち、それぞれのペースで夕方からの時間を過ごします。例えば、やまびこ工房からケアホームナウシカまでの道のりも、途中に買い物をされる方はワゴンを使わず徒歩での送迎だったりしますし、食事に関しても専任の職員が各利用者さんの好きな物、嫌いな物、また年齢を重ねて変わり始めた体型などを考えた上で一人一人に合わせて作っています。

そうは言っても、目標とする「喜んで帰りたい家」にはまだ遠く、それぞれの利用者さんにとっての「居心地の良さ」や「安心できる場所」ってなんだろう、と考える毎日です。次回からは様々なエピソードも交えながら、実際の生活を紹介していこうと思っています。(鹿野)



~2011年6月5日 第12回地域交流バザー報告~



毎年恒例にもなっている、喫茶コーナーでの『ミニ演奏会』を楽しみにバザーに足を運んで下さる方もいるようです。今年も、ドウ・シルフィードによるクラリネット四重奏で、「上を向いて歩こう」、「シンコペーテッド・クロック」、「魔女の宅急便メドレー」等、親しみのあるたくさんの曲で会場を楽しませて下さいました！



やまびこ工房の自主製作品コーナーも大盛況でした。一番の売れ筋は、ペットボトルカバー。見た目のかわいさと、夏場凍らせたペットボトルを持ち運ぶ際に、ボトルの周囲につく水滴を吸い取ってくれるという機能性を持ち合わせた点が人気の秘訣だったようです。また今回初めて出した量り売りのシールも、子ども目線の配置が功を奏したのか大変好評でした。売り上げは全部で47,420円でした。皆さん、お買い上げありがとうございましたm()m。



カブトムシの幼虫コーナーも人気で、担当ボランティアさんの計らいで、土の中で眠っている幼虫を観察させてくれたり、触らせてくれたり・・・幼虫を実際に買わなかった人も楽しんでいってくれました。



自閉症について～ご本人の声を聞くために～

顧客のニーズ → それに合った商品の開発 → 商品の宣伝 → 売れ行きの確認
大雑把に言うと、このような流れで世の中の商品は作られ、私たちの手に届いています。企業は、商品を買ってもらう、または、サービスを利用してもらうために、その顧客の年齢、性別、生活圈、職業種などターゲットを決め、その人たちが欲しいと思うようなものを開発し、宣伝して、それを買ってもらいます。こういったマーケティングの手法は、第一にお金を得ることを目的としたものですから、福祉サービスにそのまま当てはまらない部分もあるのかもしれませんが、しかし、私たちが利用者本位の支援を組み立てていく上では、まず顧客のニーズを調査することから始まる流れは、全く同じと考えても良いのではないかと思います。

風の谷では、自閉症という特徴をもった方を顧客として、その地域生活を支援するためのサービスの提供に取り組んでいます。その中で、利用者みなさんが何を考え、どんな好みをもち、どんな生活を望んでいるのか、といったことをご本人から聞き出すための方法について特に力を入れて検討しています。

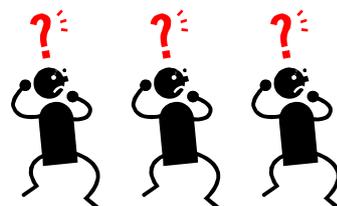
重度の知的障害を伴う自閉症の利用者の方が多くいらっしゃるため、一般的な口頭での質問や書面でのアンケート等では、なかなか聞き取ることが難しいです。そのため、ご家族やこれまで関わりをもってきた医師や学校の先生、ケースワーカー、支援スタッフからの情報収集、特にご家族からの聞き取りが多くなります。一番長く、密接に接してこられた方からの情報はご本人を知る上でとても大きな手がかりになります。ただし、ご家族の要望がそのままご本人の要望とは必ずしも言えませんので、ご本人と関わらせていただく中で、その行動をご本人からの訴えと捉えながら支援の組み立てを行なうようにしています。

具体的な方法については、特に力を入れて研究しながら作り上げていきたいと考えていますが、これまでご本人の訴えとして大事に考えてきたものの中には、様々な行動が挙げられます。例えば、視線の向きから特に気にされるものを知り、それが好きなのか嫌いなのかの確認を同じ場面を設定していったり、仕事の内容についても集中の度合いに差が出る場合が多く、そこから得意分野、取り組みやすい提示の仕方を推測することにもつながります。

自閉症の方の場合、これまでの生活の中で様々な場面を通して学習され、独特な表現方法を見につけられていることも多く、気分が悪いのに笑い声をあげられたり、「嫌い」「やりたくない」ということを伝えるために「これ、やりたい」と反対の言葉になってしまったり、個々に大きく違いがあります。またどんな状況でも一本調子の話し方になるため、「痛い」の表現からどこが痛いのか、どのくらい痛いのが分かりにくい場合もあります。そういった個々に異なる表現の特徴を理解し、その情報を積み上げていくことがご本人の「声」を聞き取ることにつながるのではないかと考えています。

決まった形での調査票があり、どなたでもそれを元にサービスを組み立てるとするのは難しいです。聞き取る、読み取ると表現したほうが良いのかもしれませんが、基本とする共通の項目を用意しながら、その方に応じた確認の方法を適切な形で作っていききたいと思います。

(野田)



後援会のページ

4月8日に開催されました『風の谷後援会役員総会』において、鈴木さんの後任として後援会会長に推薦されました佐藤と申します。

皆様のご支援を得、会長職を務めてまいりますので、協力よろしく願いいたします。(鈴木さんの功績に対して感謝申し上げます。)

後援会の役割は『社会福祉法人風の谷』が行う各種事業がより一層発展するように支援することを目的といたしております。

【地域交流バザー】・【ブルーベリージャム作りと販売】【毎月の資源回収】等々が主なる活動ですが、これらも家族会の皆様や風の谷職員の皆様のご協力を得て実施しており、最終的には『やまびこ工房』に通う我が子供たちの支援につながります。

6月5日に地域交流バザーが盛大に実施されました。昨年までは息子とふたりお客としての立場で参加し、焼き鳥・焼きそば・・・ケーキと順番に食べ終われば帰るパターンで毎年参加していましたが、今年は後援会々長の立場と農家から寄付していただいた沢山の野菜売りが担当でした。毎年いつもお世話になっている近隣の方々が沢山来ていただいたと思いますし、また家族会・職員の懸命に頑張ってくれている姿を見、『風の谷』を取り囲む団結力の強さを感じました。

今後ともご協力よろしく願いいたします。

風の谷後援会会長 佐藤 辰男



【更新・個人】平成23年1月26日～平成23年7月8日（敬称略）

（相模原市内）

石崎守 井上響子 井上進 大久保敬二 小川幸枝 荻原常寿 小原マサエ 川合義正 川島和章 菊池みどり 小針和昇 小針徳枝
小松克明 齊藤真澄 佐藤ひろし清一 鈴木秀美 鈴木フミ 田中三郎 谷口博恵 豊田幸男 西田明美 芳賀美智子 長谷川美好
原徹 辺見裕二 堀田修司 政野大 政野光廣 松本千枝子 三田二三夫 宮田勇 山崎テル代

（その他の地域）

酒井豊色子（川崎市） 田中ヒロ子 大久保秀俊（海老名市）安藤紀子 青山恵子（横浜市） ワーカーズコープ・キュービック
佐藤辰男（厚木市） 村上信治（熊本市） 佐々木継生（北九州市） 松岡清市（青森県） 下田武（西東京市） 江崎康子（藤沢市）

【ご寄付・ご協力】

新宿自治会 新宿小学校 （有）伸和トラスト ボランティアサークルきずな ワーカーズコープ・キュービック やまびこ工房家族会
林富一 椿憲雄 野崎富子 大図一代 加藤泰久 山田輝男 宮田加奈子 木下謙三 木下英夫

風の谷後援会

他大勢のみなさまありがとうございました。

風の谷後援会のご案内

風の谷後援会は、自閉症者の自立と社会参加を目指す『社会福祉法人 風の谷』を支援することを目的としております。主旨に御賛同頂き、皆様の温かい御支援を頂きますようお願い申し上げます。

一般会員 一口：3,000円／年間 団体会員 一口：10,000円

※一口以上、何口でも承ります。現金を添えてのお申し込みも承ります。

お問い合わせ先

〒252-0244 『風の谷後援会』事務局

相模原市中央区田名 7236-3 社会福祉法人「風の谷」内 TEL：042-760-1033 FAX：042-760-7115

郵便振込先 口座番号 00230-1-15345